

倉敷市とニュージーランド・クライストチャーチ市 姉妹都市提携40周年の歩み

岡山県倉敷市文化観光部国際課

倉敷市とクライストチャーチ市は1973年3月に日本とニュージーランド都市間で第1号となる姉妹都市提携を行い、昨年2013年で40周年を迎えました。同年10月には、提携40周年を記念したクライストチャーチ市民訪問団、クライストチャーチ大地震の影響で2年間の受け入れを見合わせていた学生親善使節の受け入れ、翌11月には姉妹都市提携40周年記念訪問団を派遣し、両市の多くの関係者、市民の皆さまとともに周年を祝うことができました。大きな節目の事業を終えた今、さらなる友好関係の発展に向け、両市の交流を振り返ってみたいと思います。

姉妹都市提携の経緯

1968年7月、クライストチャーチ市出身の男性が倉敷に来ました。その男性は、本市の文化・経済を研究するかたわら、倉敷市の物産展をクライストチャーチ市で開催するなど、催し物などを通じて「人と人」「心と心」をつないでいくまさに「草の根」の交流で提携に向けての道をつくりました。

やがてクライストチャーチ市から倉敷市長への公式招待状が届くなど、都市提携への積極的な呼びかけがありました。これらの要請を受け、1973年3月7日倉敷市議会は、正式に姉妹都市提携を決議、クライストチャーチ市議会も同年3月13日に両市の姉妹都市提携を確認し、ニュージーランドの都市と日本の都市の、初めての姉妹都市提携になったのです。

順風満帆な交流

姉妹都市提携を契機に文化・観光・教育など幅広い交流が始まるとともに、5年ごとに、両市関係者および市民で周年事業を実施してきました。

周年事業では、街のシンボル大聖堂での太鼓・ピアノなどの記念コンサート、サッカー・剣道などのスポーツ交流、記念モニュメントの設置など、両市

の担当者および市民が知恵を出し合って周年を祝ってきました。

また、1985年には、倉敷・クライストチャーチ市民交流協会が発足し、「人と人」「心と心」をつなぐ市民レベルの交流が着実に浸透していきました。

そのような順調な交流が続けていた時、2011年2月22日の出来事が起きてしまったのです。

クライストチャーチ大地震の困難を乗り越えて

日本人28人を含む185人の尊い命が失われただけでなく、街のシンボルであるクライストチャーチ大聖堂の崩壊、停電、断水、液状化現象など、壊滅的な被害が発生しました。

地震発生から3日後、救援隊3人（国際課長および救急救命士2人）を派遣したのをはじめ、その後も一日も早い復興を願い行政と市民が一体となって姉妹都市としてできる限りの物的支援・募金活動などによる金銭的支援を行いました。



救援隊市庁舎出発式

当然のことながら、青少年・障がい者の交流事業をはじめすべてのクライストチャーチ市との交流事業は一時中止を余儀なくされました。40年の交流のなかで乗り越えなければならぬ一番厳しい時を迎えました。

さらに、同年3月11日、日本でも未曾有の大災害が起きてしまったのです。

姉妹都市提携40周年記念事業—震災からのさらなる復興と友好の発展を目指して

(1) 40周年記念事業に向けて

倉敷市は4つの姉妹友好交流都市をもち、各都

市とそれぞれ特徴をもった交流を展開しています。2012年度にはオーストリア・サンクトペルテン市と55周年、アメリカ合衆国カンザスシティ市と40周年を記念し、記念訪問団の派遣・受け入れ、パイプオルガンコンサートなどで周年を祝いました。そしてその頃から、姉妹都市提携40周年に向けての準備が始まりました。クライストチャーチ市姉妹都市委員会のデービッド・ボーラムスミス会長をはじめ、多くの姉妹都市関係者から、40周年という節目の事業を通じて「クライストチャーチ大地震・東日本大震災からのさらなる復興・両市のさらなる友好の発展」への強い思いが協議の段階からひしひしと伝わってきました。

(2) 40周年記念訪問団・学生親善使節の受け入れ

姉妹都市委員会会長のデービッド・ボーラムスミス氏を団長とした市民団（サッカー団、陶芸団含む）35人、学生親善使節14人、引率者2人の総勢51人が来倉されました。10月11日から17日までの7日間、学生は11日から24日までの14日間を基本に各自のプランを交えながら、倉敷での滞在を楽しんでいただきました。なかにはホームステイ先を独自で確保される方もかなりおられ、両市民の長年培ってきた友好関係を垣間見ることができました。

また、表敬訪問、マーク・シンクレア大使をお迎えしての記念モニュメント完成式・祝賀会などの公式行事、サッカーフレンドシップマッチなどの市民交流事業、市内視察などを通して、両市の交流を振り返るとともに、姉妹都市の絆をより一層強くしました。

(3) 40周年記念訪問団の派遣

2013年11月、伊東市長を団長とする51人の市民訪問団および11人の市議会議員団がクライストチャーチ市を訪問しました。クライストチャーチ市からは、リアンヌ・ダルズィール市長をはじめ、市議会議員のメンバー、さらに姉妹都市委員会の皆さまに

迎えていただきました。滞在期間は2泊3日と短いものでしたが、鼻と鼻を合わせるホンギと呼ばれるマオリ式の歓待から始ま



モニュメント除幕式

り、記念式典、記念モニュメント除幕式、倉敷から寄贈した街灯のお披露目式、紙の大聖堂でのコンサートなど、非常に濃密な時間を過ごすことができ、多くの両市の関係者とともに周年を祝うことができました。

事業の成果と今後に向けて

(1) 事業の成果

「震災からの復興と友好の発展を目指して」そんな強い思いのなかで行われた40周年記念事業でした。両市共通の想いを3本の木に託し、双方の姉妹都市公園に記念モニュメントとして残すことができたこと、エイボン川河畔に倉敷美観地区で使われている街灯を寄贈し、姉妹都市倉敷から復興の灯（シンボル）を届けることができたこと、また震災後新たに建設された紙の大聖堂で、倉敷市出身の岸本萌乃加さんのバイオリンコンサートを開催できたことなど、周年事業を通じて両市関係者の心を一つにできたことが大きな成果だと思います。

(2) 今後に向けて

40周年記念訪問団・学生親善使節の受け入れ事業では、倉敷・クライストチャーチ市民交流協会の皆さまに受け入れプラン策定の段階からかわっていただくなど、ボランティア通訳、サッカーに参加してくださった多くの選手関係者の皆さまなど、市民参加型の受け入れ事業を展開しました。回転寿司店を一部貸し切りにしての歓迎夕食会を行うなど柔軟かつ斬新なアイデアもあり、新たな受け入れの形も見えてきました。

周年を終えた2014年度も4月には日本語学習中の高校生の受け入れ、5月には障がい者親善大使の受け入れ、8月、10月には学生の相互派遣、武道団の来倉など多くの事業が予定されています。

クライストチャーチ市出身の男性の「草の根」の交流にはじまった交流は、40周年の大きな節目を刻みました。しかし、「人と人」「心と心」その原点は全くかわることはありません。震災の時など苦しい時はお互いに助け合い、若者・青少年の相互交流、障がい者交流など市民参加の交流事業を、地味に愚直に続けていくなかで、両都市のもつ新たな交流の可能性についても模索していきたいと考えています。